

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：33917

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2023

課題番号：19K23090

研究課題名（和文）19世紀後半のドイツ語文学における「地方」と「ガリツィア」の表象の比較

研究課題名（英文）Comparison of the representation of 'provinces' and 'Galizia' in late 19th century German language literature.

研究代表者

麻生 陽子（Aso, Yoko）

南山大学・外国語学部・講師

研究者番号：00844367

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,700,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、18世紀末以降20世紀初頭までハプスブルク帝国オーストリア領ガリツィアの描写について研究を行った。ことにガリツィア出身のドイツ語作家ヨーゼフ・ロートの長編『ヨブ』（1930）に登場する東方ユダヤ人のアメリカ移民、さらにはエッセイ『ガリツィアへの旅』（1924）における多民族・多言語が混在したレンベルクの街の様子には、周縁の地方の農民やユダヤ人の貧困やそれにとまなうアメリカ移民だけでなく、高揚するナショナリズム、さらにはガリツィア消滅後も言語的・民族的・宗教的な多様性をハプスブルクの多文化共生時代の名残として見出そうとする作家の願望が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2022年春のロシアによるウクライナへの侵攻以降、ウクライナは世界にふたたび注視されているが、その実態は日本だけでなく欧州のオーストリアでもあまり知られていない。オーストリア領ガリツィアにかんする本研究（とくにヨーゼフ・ロートの『ガリツィアへの旅』の分析）は、ウクライナ西部の言語的・民族的・宗教的な錯綜が常態である現状を、戦間期のテクストから逆照射した。ロシアとは異なるアイデンティティを求めて西欧への帰属を志向するウクライナ西部の現状を、たんに政治的・社会的のみならず、文化的・情緒的な側面から考えるうえでもロートにかんする本研究には社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：This study examines representations of Galicia, an Austrian possession of the Habsburg Empire from the late eighteenth to the early twentieth century. In particular, the depictions of Eastern Jewish immigrants to the United States in the novel "Hiob" (1930) by the German-Jewish writer Josef Roth, who was born in Galicia, and of the multiethnic and multilingual city of Lemberg(Lviv) in his essay "Reise durch Galizia" (1924) show the poverty of peasants and Jews in the peripheral regions and the accompanying immigration to America. The accompanying American immigration, as well as the exuberant nationalism and the writer's desire to find linguistic, ethnic, and religious diversity as a remnant of the Habsburg multicultural period, even after the disappearance of Galicia, were evident.

研究分野：ドイツ語文学・オーストリア文学

キーワード：ガリツィア ハプスブルク オーストリア ウクライナ

1. 研究開始当初の背景

1840年代以降に流行した「村物語」のなかで、「地方」は西欧読者の前近代な世界にたいする憧憬を投影する実在の場所として「美化」されて描かれた。なかでも、ハプスブルク帝国の属領となつて以降、現代に至るまで様々な方面から注目を集め、独自の文学的トポスを形成しているのが、ガリツィア地方である。

本研究の対象であるガリツィア・ロドメリア王国(以下、ガリツィアと略記。図1参照)は、現在のポーランド南東部とウクライナ西部一帯に位置する。1772年の第一次ポーランド分割の結果、ガリツィアはオーストリア・ハプスブルク帝国最大の帝室直轄地として誕生して以降、帝国の北東の周縁部に位置し、西欧とロシアとの境界領域をなした。

ガリツィアにはポーランド人、ルテニア人(ウクライナ人)、ユダヤ人、ドイツ人、さまざまな少数民族が住み、ローマ＝カトリック、ギリシャ＝カトリック、ユダヤ教等という異なる宗教や文化が混在していた。他方で、原材料の供給地にとどまり、経済的・工業的發展が遅れたガリツィアは、19世紀後半も農業に依存し、貴族領主による土地所有が支配的だった。土地を持たない農民やユダヤ人の経済的な貧困は、国内外への大規模な移住を招くことになった。

「ガリツィア」は18世紀末以降、オーストリア、とくに中央の側から見て改革を推進されるべき「後進的」な空間として政治的に捉えられた(Wolff 2010)。貧しいユダヤ人のイメージがそのままガリツィアのイメージとなったように、「貧困」もまたガリツィアのトポスの一つとなる。

「貧困」「多文化性」「多民族性」「伝統」等の属性をもつ前近代的なガリツィアは、ナショナリズムや国民国家に特徴づけられる近代性に疑問符を突きつける場所となっていく(Hücktkar 2003)。

「ガリツィア」をはじめ、19世紀の「村物語」における「地方」も「美化」の手法で描かれているが、中央にたいする批判的な視点をも併せ持っており、両者の間には共通点も少なくない。「地方」も「ガリツィア」も、帝国崩壊の兆しのなかで現実隠蔽と現状維持に固執しながら失われていく世界を美化して描いたオーストリア文学に特徴的な「ハプスブルク神話」(Magris 1966)を担う場所だった。そのなかで「ガリツィア」にあっては文学的トポスが形成され、ガリツィア消滅後も文学テキストのなかで描かれていった。

本研究の問いは以下の通りである。1)19世紀中葉以降のオーストリアの地方文学のなかで「地方」はどう描写され、2)「地方」と「ガリツィア」の描写の差異や共通点はどの程度あるのか。

2. 研究の目的

オーストリア・ハプスブルク帝国の東の辺境に位置するガリツィアは、「貧困」「後進性」「多文化性」「ユダヤ文化」等が先鋭的にみられる「地方」として、18世紀末以降、独自の文学的トポスを形成している。第一次世界大戦におけるハプスブルク帝国崩壊にともない、ガリツィアという名前も地図から消滅したが、ガリツィアは文学テキストのなかで多民族共生時代を象徴する歴史的・文学的な空間として繰り返し描かれてきた。帝国領内の他の地方の田舎も「村物語」という文芸ジャンルのなかで「美化」されて描かれたが、「ガリツィア」のような文学的トポスの形成には至らなかった。

本研究ではその理由を問うべく、文学的トポスとしての「ガリツィア」の生成過程をたどり、「地方」と「ガリツィア」の描写にかんするテキスト分析を行う。近代化へむけて社会全体が大きな変化を遂げた19世紀後半に書かれた「ガリツィア」をはじめとする地方の描写の分析することで、「地方」が中央・都市部に顕著にみられる近代性を批判的に映し出す視点となる可能性だけでなく、数値やデータ等など歴史資料では把握しがたい、住人たちが抱いた理想や願望といった文学的表現を明らかにすることを目的とする。そのさいガリツィアをはじめとする地方に共通してみられる同時代の現象にも注目する。貧困、農業問題、移住、反ユダヤ主義、民族対立等は、都市部の飛躍的な経済発展や高揚するナショナリズムを映し出すネガにほかならないためである。

3. 研究の方法

本研究では、1)文学作品のテキストの分析と並行して、2)海外での現地調査および資料収集を行う。

1) 文学作品のテキスト分析：

19世紀という同時代現象を、中央の側からではなく、地方あるいはガリツィア地方出身の当



図1 オーストリア・ハンガリー帝国とガリツィア

事者の側から描いたドイツ語作家として、19 世紀チェコ語圏モラヴィア生まれのマリー・フォン・エーブナー＝エッセンバッハ（1830-1916）やガリツィア出身のユダヤ系ドイツ語作家ヨーゼフ・ロート（1894—1939）の作品を対象とする。ドイツ語作家が依拠した当時の資料も参照しながら、「ガリツィア」にかんする文学作品のテキスト分析を行う。そのさい、複数の言語や民族、宗教が混在したガリツィアに特有の事象（例えばユダヤ文化など）に注目しながら、同時に、地域を越えて地方に共通して見られたはずの同時代の事象（農業問題、歴史的事件、貧困、北南米への移住など）にも目を向け、19 世紀という時代を地域横断的に分析する。

2) ガリツィアにかんする知見を得るための現地調査：

叙述された作品世界および作家にたいする理解を深めるためにも、オーストリアのウィーンをはじめ、ポーランド南部およびウクライナ西部のリヴィウなどで現地調査を行う。ガリツィアが位置した現在のポーランド南部のクラクフをはじめ、ウクライナ西部のリヴィウ、オーストリアのウィーン等では、ガリツィアにかんする歴史、ユダヤ関連の知見を得るべく、博物館や資料館に赴き、調査および資料収集を行う。さらに、作家ゆかりの場所や作品舞台、企画展等に実際に足を運び、大学図書館や博物館等で資料を閲覧、収集する。

4．研究成果

当初の計画通りに「ガリツィア」との比較対象としての地方を描いた文学テキストの分析については、十分に行うことができなかったが、ガリツィアにかんする歴史的資料の読解や、オーストリア領ガリツィアを描いた文学テキストの分析を通して、一見して否定的なガリツィアのトボスには、中央にみる規範やナショナリズムにみる近代性を批判的に捉えうる契機が含まれていることが明らかになった。

今回取り上げたいずれの作品においても、貧困というガリツィア的なトボスを確認することができた。ガリツィアの否定的側面として捉えられる「後進性」「民族アイデンティティの混沌にみる前近代性、さらには地理的な周縁性は、多民族国家ハプスブルクの存続を願ったエーブナー＝エッセンバッハや、ハプスブルクという故郷を喪失したユダヤ人作家ロートにあって、近代性を批判する要素として肯定的に捉え直されて表現されている。

1-1) エーブナー＝エッセンバッハ『ヤーコプ・シェーラ』『郡医官』（『村と館の物語』（1873）より）の分析

ポーランドの独立運動や 1846 年に起きた農民によるガリツィアの蜂起などの史実を題材としたテキストから、帝都ウィーンにみるオーストリアの中央政府と地方との関係性を分析した。封建制度が残るガリツィア地方にはさらに、地元で権力をふるうポーランド系の領主貴族と搾取される農民という典型的な対立構図があるだけでない。ポーランドの独立運動が展開されるなかで、民族的なアイデンティティが覚醒していない農民および民族的な帰属が曖昧なユダヤ人は、オーストリアの中央権力とそれと対立する地元の領主貴族との狭間にある。かれらのアイデンティティを形作るものは、皇帝という遠い存在にたいする忠誠心として描かれる。しかしながらかれらは、19 世紀後半に高揚するナショナリズムや反ユダヤ主義を前に、自らの民族的アイデンティティを選び取るという困難な選択が迫られる。民族的な構成が複雑でユダヤ人が多く居住したガリツィアを舞台に、エーブナー＝エッセンバッハの作品では多民族国家ハプスブルク帝国において人々を束ねる権威であった皇帝という象徴的存在と、それに取って代わる偏狭なナショナリズムの到来が、農民およびユダヤ人の民族アイデンティティの形成を通して描出されている

1-2) ヨーゼフ・ロートの旅行記『ガリツィアへの旅』（1924）

東ガリツィア出身のロートは、第一次世界大戦後、あらたにポーランド領ルヴウと名称を変えた旧ガリツィアの首都レンベルク（現在のリヴィウ）に赴く。ロートはこの時期のポーランドのナショナリズムに伴う街の変化を敏感に察知し、第一次世界大戦および民族対立の痕跡にも言及しながら、この地になお息づく多民族・多言語・多様性という痕跡を確認するように活写する。タイトルも示唆する通り、世の中が第二次世界大戦へと向かう中、失われつつ多文化共生した場所としてのガリツィアのレンベルク、ひいてはハプスブルク時代が古き良き過去として回顧している。ロートが強調する周縁の地方としてのガリツィアの前近代性・特異性は、近代性、ことにナショナリズム

本研究当初には予想をしていなかったことだが、2022 年春にロシアによるウクライナへの侵攻が開始され、それ以後ウクライナは世界にふたたび注視されている。そうした状況にあって、第一次世界大戦後にウクライナ西部のリヴィウに赴いたロートのテキストが、ロシアとは異なるアイデンティティを求め、ガリツィアがハプスブルク領だったという歴史を根拠に、西欧への帰属意識を表明する、ウクライナ西部の政治的状況とも少なからず関連する視座を含んでいるということもまた明らかになった。本研究を通して、近年のウクライナにおける「ハプスブルク・ルネサンス」と呼ばれる現象についても調査することで、19 世紀のガリツィア地方に関連する文学研究を行うことの現代的な意義を見出すことができるのではないかと、という新たな研究テーマを発見することもできた。これは、本研究を通して得た副産物である。

2) 現地調査：

本研究期間(2019-2023。3年延長)は、新型コロナウイルス感染症の流行により、当初の予定通りに現地調査を複数回実施することはできなかった。また、2022年春からのロシアによるウクライナ侵攻により、本研究とも関わりのあるウクライナ西部への渡航の見通しもまだ立っておらず、ガリツィアの首都リヴィウおよびヨーゼフ・ロートにゆかりのある場所に行くことは困難となっている。

しかしながら2023年度に初めて、報告者がもつ科学研究費助成事業(21K12967)と合わせて、ウクライナのリヴィウ以外、オーストリア(ウィーン)とポーランド(ワルシャワ、クラクフ)で現地調査および資料収集を行った。ワルシャワでは、ポーランド・ユダヤ人歴史博物館(Polin)、ユダヤ歴史研究所(Jewish Historical Institute, JHI)を、クラクフでは複数のシナゴークほか、ガリツィア・ユダヤ博物館などでは、豊富な視覚資料を見学することができた。第二次世界大戦によって民族的多様性は失われ、ユダヤ文化は破壊されてしまったが、それでもなお戦火等生き延び、現存する建造物等には、ガリツィアの痕跡をたどることができた。

ウィーンではヨーゼフ・ロートやエーブナー＝エッセンバッハの居住地跡を確認し、オーストリア文学博物館ではガリツィア関連の展示を見学した。オーストリアの文学史を、テーマごとに、草稿や作家に関係する衣装などとあわせて視覚的にも見学することができた。ことにウィーン博物館では、19世紀関連の展示物(ビーダーマイヤー関連の絵画、19世紀後半のリング通りの時代、世紀転換期)には、知らないものも多くたいへん興味深いものが多かった。

5．主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1．著者名 麻生陽子	4．巻 115
2．論文標題 両大戦間期のウクライナ西部の町リヴィウ ハプスブルク時代の痕跡をたどったルート『ガリツィアへの旅』	5．発行年 2024年
3．雑誌名 アカデミア	6．最初と最後の頁 225-247
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件／うち国際学会 0件）

1．発表者名 麻生陽子
2．発表標題 ヨーゼフ・ルートが見た「ウクライナ」ードイツ語文学におけるガリツィア地方
3．学会等名 南山学会 文学・語学系 春学期研究例会（招待講演）
4．発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6．研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------